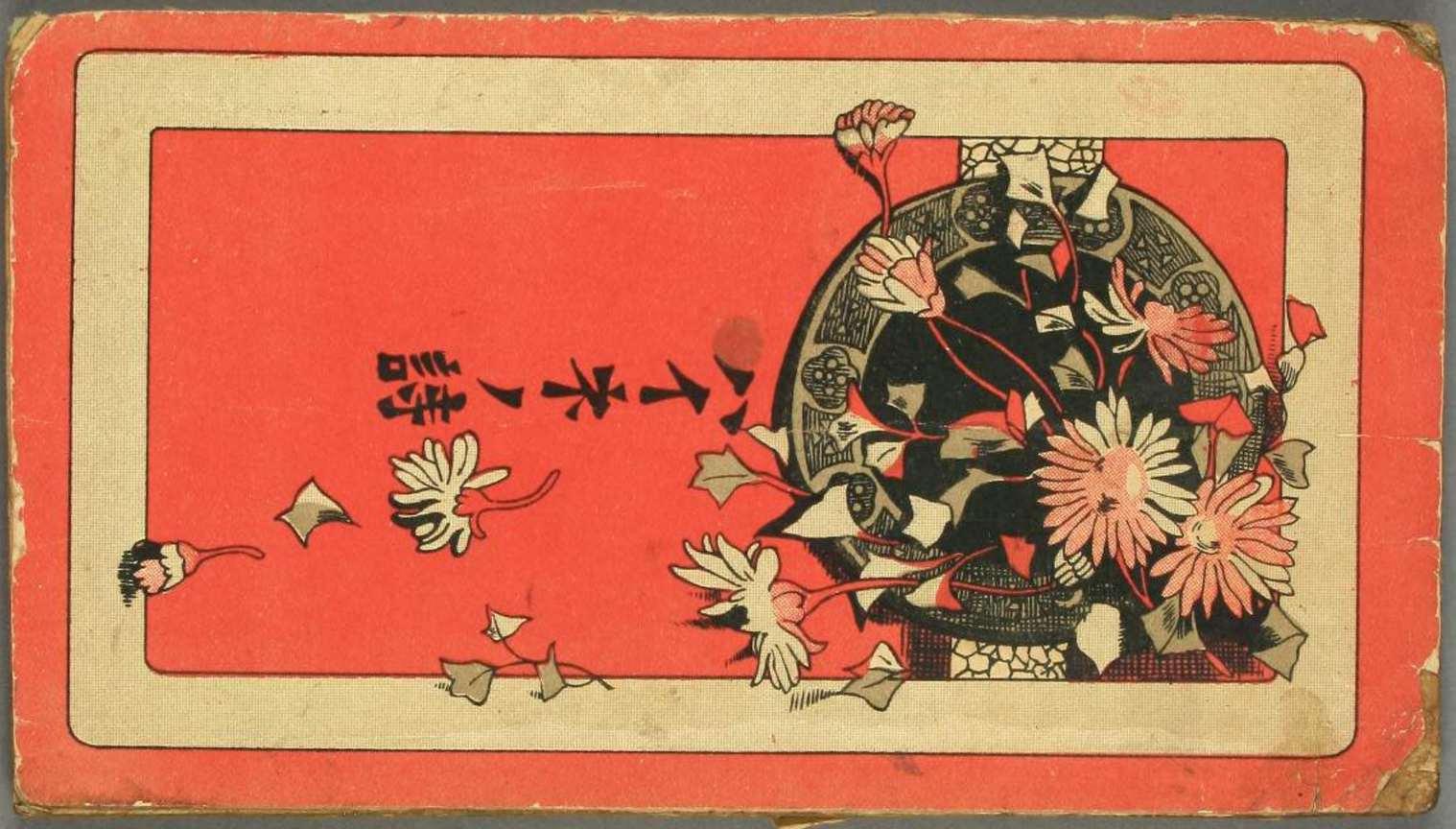

建上柴舟譯

八代の詩

Ich bin ein Deutscher Dichter,
Bekannt im Deutschen Land,
Nennt man die besten Namen,
So wird auch der meine genannt.

H. HEINE,

序

余は獨逸の詩人中、最もハイネを好むものなり。その一生は辛酸數奇を極め、殊にその晩年の境遇の如きは殆んど人をして悲痛の念に堪へざらしむ。ハイネの詩こゝに於て愈々益々觀るべし。

ハイネの詩は、グエテの天眞を有せずといへども、しかも流麗は伯仲の間にあり。シルレルの雄渾に及ばずといへども、しかも奔放自在の妙は却てこれに過ぐ。

而して冷罵百出諧謔縱横の怪腕に至りては、獨逸文學史を通じて、全くその比を見ざるところなり。若し夫れ冷罵のうちに涙あり、諧謔のうちに教あるが如きは史にその詩をして古今獨歩たらしむる所以なり。

譯者尾上柴舟君は余が友なり。夙に國文國歌に精通しその流麗なる筆致は同人の敬慕措かざるところ。今やその椽大の筆を揮て、ハイヲの詩の尤なるもの幾十編を譯述し、以て世に問はむとす。その苦心慘憺の功勞

は、讀者のまさに看取すべきところならむ。

現時吾が文壇の大なる缺陷を求むれば、外國文學飜譯の不振、實にその一に屬す。されば此の書の如きは啻に獨逸の詩歌集の飜譯の嚆矢を以て誇るに足るべきのみならず、又實に吾が文壇の不振を警醒鼓舞して餘あるものと謂ふべし。

ハイヲがその詩集に序せる言葉の終りに曰く、太陽はかくも美はしく輝けども、終にはまた沒するを見ずや

た。されど太陽はまた再び現はるゝなり。五十年前に敗殘落魄の身を以て沈痛悲壯の歌を詠せし彼は、五十年後の今日、大東の日出國に於て幾多の渇仰者を有せむことは、彼の思ひしところなりしや、あらずや。

登張竹風識

例言

「ゲエテ」に次げる叙情詩人と稱せられたる「ハインリッヒ、ハイネ」の詩五十篇、摘譯して「ハイネの詩」といふ。彼れの詩、實に數百篇に跨ゆ。而して僅かに其五十篇を取れるもの、彼れの面目、明らかに、此間に認め得べしと信ずればなり。

五十篇、皆、Buch der Lieder 及び Neue Gedichte より取る。而して、其配列の順序は、すべて其作の順序に從へり。即ち Lyrisches Intermezzo (1822-1823) 中のものを先とし、Verschiedene (1832-1839) 中の者を後とす。但し Junge Leiden (1817-1821) 中の Lieder は、些か故ありて、Die Heimkehr (1823-1824) の後に置けり。

原詩、もと、一々題號なし。故に、これに宛つるに、其詩の第一行を以てしたり。われもまた、假りに、譯歌の初句を以て、題號となし、以て、その顰に倣へり。

編中の或者は、嘗て、讀賣新聞紙上に掲載したることあり。今、又、訂正して爰に載す。

巻末の評傳は、わがハイネに關する零碎の智識を集めたるもの。其年月の如き、諸書、其傳を異にせる處あり。今は、其普通と信ずるものによれり。

譯歌の瓦礫、原詩の金玉を傷くること、尤も甚し。譯し了て、深く、わが不才を愧づ。

柴舟生識

ハイネの詩目次

(Buch der Lieder より)

おのが涙……一
おのが心……二
はてたき空……三
歌のつばさ……五
てる日の影……七
菩提樹の花……九
小さき眼……一〇
荒れわたりたる……一一
かゞやきわたる……一二
照る日かゞやく……一三
汝が麗しき……一四
その光ある……一五
暗のわが世に……一七
おのが心……一九
涙おさへて……二三
澄み上りたる……二三
灰色なせる……二四
あらしは鳴りつ……二五
君が門邊……二七
海原とほく……二九
波路の末……三一
深きおもひ……三三
年のゆきき……三四
淸くゆかしく……三六
そのくれなゐ……三七
もの恐ろしき……三八
夜は來ぬ……四一
死ぬ冷やけき……四二
わが戀人と……四三
とく起きいでゝ……四四

思ひ慣みて……四五
父の御園……四七
（Neue Gedichte より）
たのしき五月……五〇
千度八千たび……五一
春の夜風……五三
あきらけき眼……五四
みどり色濃き……五六
さか捲きおこる……五七
心にながく……五八
月影うけて……五九
とく森かげに……六二
黄金の光……六三
今年の春……六五
静けき磯……六六
影ほのぐろし……六六
我をば君が……七一
黒みわたれる……七二
君がなしたる……七三
鷗はなどて……七三
わたのみ中に……七四

増補

痛み苦み……七六
梢に秋の……八二
蜜のとまや……八四
橙の色……八八
かさなる雲……九〇
樅の大樹に……九二
かゞやきそむる……九八

ハイネの詩目次終

ハイネの詩

尾上柴舟

おのが涙

おのが涙のしたゝらば
麗しき花咲きぬべし
おのがなげきの響きなば
鶯の音となりぬべし

われを思はゞをとめ子よ
花をば君にまゐらせむ
きみが窓邊にうるはしき
鶯の音もひゝくべし

○

おのが心

おのが心をさき匂ふ
小百合の花に浸してむ
戀しとおもふかの君の

うたをば花は歌ふべし
その歌ごゑはかの君の
接吻(キス)の如くにふるふべし
たのしみ極みあらざりし
そのをり君が與へたる

○

はてなき空

はてなき空に幾千年

動かぬ星のかげしげし
愛のおもひをあらはして
かたみに眺めかはしつゝ

彼等はいひぬ美しき
こゝろ富みたる言の葉を
されども教へる人も
解きぞかねつるそのこゝろ
われは學びぬそのことば

われは忘れずそのこゝろ
曉るしるべとなりにしは
こひしき君のそのおもわ

○

歌の翼

歌の翼にうち乘せて
君をばわれは運びてむ
ガンゲスの野にほど近く
美しき地をわれは知る

静けき月のかげうけて
くれなゐにほふ花の園
その誠あるはらからを
待つは澤邊の花はちす

菫は笑みつかたらひつ
見るよみ空の星のかげ
ゆかしき戀のものがたり
うちさゝやくは花薔薇

やさしく賢こき羚羊は
あるはをどりつ窺ひつ
ゆく手遥かにきこゆるは
きよき流の波のおと

棕櫚の樹かげに君とわれ
こゝろ静かにやすらひて
愛と休みをいざうけむ
たのしき夢をいざ見てむ

○

てる日の影

てる日の影に堪へかねて
惱みがほなる花はちす
そのかしらをばうち低れて
待つなり夜を夢みつゝ

月こそ花の戀人よ
やさしき彼れが光もて

夢より花をよびきまし
照らしいでたりそのおもわ

花は開きぬあからみぬ
しづかに空を仰ぎ見ぬ
愛のおもひの痛みより
かをりぬ泣きぬおのゝきぬ

○

菩提樹の花

菩提樹の花香ににほひ
うぐひす啼きて麗はしく
日影さす日にわれを君
接吻しつつ抱きつその胸に

木の葉ちりかひ鳥なき
日かげさびしくてらす時
わかれを告げぬ冷やかに
されど姿はいややかに

○

小さき眼

小さき眼の青すみれ
小さきおもわの紅薔薇
小さきやは手の小百合花
にほひは今もかはらねど
君がこゝろは萎みにき

○

荒れわたりたる

荒れわたりたる北國の
岡邊に立てる一つ松
雪と氷の白衣に
つゝまれながらうち眠る

思ふもとほき東の
てる日燃えたつ崖のうへ
しのびねになる一本の

棕櫚こそ見ゆれその夢に

○

かゞやきわたる

かゞやきわたる日の影に
むかはぬ花ぞなかりける
かゞやきわたる海原に
注がぬ河ぞなかりける

かゞやきわたるわが君に

ひゝかぬ歌ぞなかりける
涙となげきそれのみか
うひませ君よわが歌も

○

照る日かゞやく

照る日かゞやく夏の朝
花の園生をさまよへば
花はかたりぬ呟きぬ
されども我は默したり

花は語りてさゝやきて
我をば見たり憐れげに
「わが同胞を愛しませ
かなしく青く見ゆる君」

○

汝がうるはしき

汝がうるはしき頰の上に
みゆるは暑き夏の色
小さき心にひやゝけき

冬のけしきはありながら
戀しき人よたちまちに
かはりゆくべし汝がさまは
頰には冬の色ながら
こゝろのうちは夏のごと

○

その光ある

その光ある雲井より

流れておつる星のかげ
きやかにわれの認めしは
愛のしるしのそれなりき

かぎりも知らず花も葉も
散るよ林檎のこずゑより
小枝ゆすりてふく風は
その葉とあそび花と舞ふ

池の白鳥こゑたてゝ
かなたこなたに泳ぎつゝ
歌聲低くひゞかして
しづむよ清き水底に

静けくくらく今なりぬ
花さへ葉さへ散りはてぬ
み空の星もとびさりて
白鳥の歌また絶えぬ

○

暗のわが世に

暗のわが世に一度は
たのしき影のかゞやきぬ
それだにいまは消えはてゝ
夜こそつゝめたゞ我を

暗のま中にさまよひて
ものゝわびしくなれる時

子らは歌ふよ聲たかく
心のおそれ逐はむとて
狂へる子らに變らねば
うたふよ我も暗のうちに
樂しきひゞきあらねども
おそれは逐ひぬわが歌は

○

おのが心

おのが心のいかなれば
かくは悲しくなりぬらむ
たゞそのかみの物語り
湧きこそいづれおのが胸

風冷やかに暮れそめて
ゆふべ靜けしライン川
沈みゆく日の影うけて
かゞやきわたる山の峰

みめ美しきたをやめの
姿ぞみゆる山のうへ
黄金のかざりひらめかし
とくや黄金のみだれ髪

黄金の小櫛手にとりて
ときつゝ歌ふ聲すなり
おどろくばかり力ある
しらべをたかく響かして

小舟こぎゆく舟人は
怕れそめたりその歌に
かくれし礁見もやらで
ただうち仰ぐぐ山の上

小舟の影も人かげも
たちまち沈む浪の底
あやしき奇しきしらべもて
かくなしつるよローレライ

○

涙おさへて

涙おさへて繁りあふ
森のこかげをさまよへば
こずゑの鵯うたふなり
「なにとて君は嘆きます」
汝がはらからの燕は
なれに告ぐべしわが思ひ

戀しき人の窓ちかく
塒さだむる鳥なれば

○

澄み上りたる

澄み上りたる月影に
隈こそなけれ浪のうへ
小女のうなじわがまけば
こゝろ空なり諸共に

人の腕(かいな)にいだかれて
われは憩ひぬ岸の邊に
「吹きくる風にきくは何
などうち震ふ君が御手」

風のそよぎのゆるならず
人魚のうたの響くため
波にじゝみて年を經る
妹(いもと)の聲の響くため

○ 灰色なせる

灰色なせる雲の中に
いま大神ぞうちねぶる
彼等のいびき我はきく
荒れあらしはたゞそれよ

あらきあらしに憐れなる
我舟破(や)れむ散はてむ

あゝこの風と主なき
浪とをたれか靜むべき

あらしも舟のきしめきも
止めむすべのあらざれば
我は纏ひぬうは衣を
神の如くに眠らむと

○

あらしは鳴りつ

あらしはなりつ笛ふきつ
舞踏のしらべ奏すなり
すはこそ躍れわが小舟
たのしくあらきこの夜半よ

生きたる如き浪の山
怒れる海に起りたり
こゝに青淵湛ふれば
かしこにたらぬ白き塔

呪咀も吐瀉も唱名も
まじりてひゝく舟の中
身を檣によせかけて
われは思ひぬわが家を

○

君が門邊

君が門邊のゆきずりに
すがた小さく愛らしき
君をば窓に見つる時

よろこばしくも我なりぬ
黒みもまじる青き眼に
訊ぬるごとく君は見ぬ
なにとか名のる何なやむ
かよわき人よ見ぬ人よ
その國人にしられたる
我は獨逸のうた人ぞ

世にすぐれたる人數に
かずまへらるゝ我身なり

我なやみこそをさな兒よ
その國人のなやみなれ
つよきなやみのその數に
數まへらるゝなやみなれ

○

海原とほく

海原とほく沈む日の
かげこそのこれ波の上
ことばもなくて蜑が屋の
中にやすらふ君とわれ

霧たちのぼり汐みちて
とぶや鷗の影しろし
涙はおちぬ愛らしき
ゆかしき君がまなこより

眞白き君が御手の上に
おつる雫をわれは見ぬ
膝をりふせて唇を
そのしたゝりに濕しぬ

思ひなやみてそれよりは
心もきえぬ身もやせぬ
さちなき君が涙こそ
傷りはてたれあゝ我を

○

波路の末

波路の末にはるゝ〳〵と
街こそ見ゆれほのじろく
なごりの光につゝまれて
かすかに立てる塔の影

しめりはてたる夕風の
わたるもさびし波の上
かなしき櫂の音たて

水底ぞ漕ぐなる我が小舟

沈める夕日にはかにも
照りこそかへせ花やかに
こひしき人を失ひし
處をそことしめしつゝ

○

深きおもひ

深きおもひにうち沈み

人の繪姿みつむれば
はしき顏容は見るがうちに
生けるがごとくなりそめぬ

その唇はおもはずも
ゆかしき笑をもらしけり
憂の涙やどすごと
双のまなこはかゞやきぬ

頬をつたひて自づから
おのが涙もおちくなり
いかで思はむおもはれむ
この世の中に君なしと

○

年のゆきゝ

年の往來のはやくして
人は墓にぞくたりゆく
さはいへおのが胸の中に

のこれる戀の消ゆべしや
君を見るべしひと度は
きみが御前に膝をりて
心づよくもいひいでむ
「君をば我は戀ひせり」と

○

清くゆかしく

清くゆかしく麗はしき

汝は花にも似たるかな
さはいへ汝を見るときは
かなしき思ひぞおこるなる

汝がかしらにおのが手を
載せむとこそは思ふなれ
とはにゆかしく麗はしく
清くと神にいのるべく

○

その紅

そのくれなゐの唇よ
その美はしきまなざしよ
はしき少女よをとめ子よ
われは思へり君のみを

冬の夜長のこのごろを
きみとならびて語らひて

ふかさまほしく思ふかな
君がしめたる部屋にして

わが唇にあてゝみむ
白く小さき君が手を
おつる涙にうるほさむ
しろく小さき君が手を

○

もの恐ろしき

もの恐ろしき夢のごと
列なり立てり家のかげ
身をうは衣にまとひつゝ
黙して獨われは行く

御寺の塔にうつつ鐘は
いま眞夜中を告げにけり
その愛敬と接吻ともて
われをまつなりこひ人は

月こそわれの友どちよ
われを照せり親しげに
人の家居にゆきつきて
よろこばしさに我はいふ

「むかしの友よ我は謝す
わが來し道をてらしゝを
いまわれ汝とわかれなむ
汝は照らせよよそ人を

おもひ惱みて人しれず
戀にくるしむ人を見ば
汝はなだめよそのかみに
われをなだめし時のごと」

○

夜は來ぬ

夜は來ぬしらぬ道のべに
こゝろ痛みぬ足なへぬ
あゝさしくなり月かげの

靜けきめぐみさながらに
あゝ心地よき月かげよ
夜のおそれる汝は逐ひぬ
こゝろのなやみを汝は消しぬ
わが眼に露をやどしつゝ

○

死は冷やけき

死は冷やけき夜にして

あつき日なれや人の世は
暮れゆくまゝにわれ眠る
晝の疲れにたへかねて

聞きしおほひ茂る樹に
わかき鶯やどしめて
こひ歌たかく囀づれば
われは聞くなり夢にても

○

わが戀人と

わが戀人とわがをれば
心は空になりにけり
この大地もいかでかは
心の富にかへつべき

されども人の玉手より
分るゝ時となりぬれば
富もいつしか消えうせて

乞丐の如く身はなりぬ

○

とく起き出でゝ

とく起き出でゝ戀人の
來るかと問はぬ朝ぞなき
されども今日も來ざりきと
云ひつゝ詫びぬ夕ざれば
堪へぬ思に沈みては

ねぶりぞかぬる夜もすがら
なかばさめつゝ夢みつゝ
さまよひ行くよ明けゆけば

○

思ひ悩みて

思ひ悩みてたゞひとり
木の下かげをさまよへば
昔のゆめはひそやかに
こゝろの中に起りきぬ

梢の鳥よ汝がうた
たれより汝は習ひしぞ
歌ふなしばしそを聞けば
むねの思のまさりゆく

「歌をばたえずうたひたる
處女のこゝに來つる時
われら小鳥はうるはしき
黄金のことば習ひえぬ」

そをは語るな今更に
汝こざかしき小鳥らよ
わがかなしみを奪ふには
よわきに過ぎぬ汝が力

○

父の御園

父の御園に青じろき
花こそ匂へかなしげに
冬過ぎ春は來つれども

かはるともなしその色は
病をうけし花嫁の
なやみに堪へぬ如くにて
「我を摘みませ同胞(はらから)よ」
花はかたれりひそやかに
されどもわれは答へけり
「われ摘みとらじ摘みとらじ

われは勵みて苦みて
紫の花もとむれば」
青白き花またいひぬ
「君が命をつくしても」
求めてもみよその花を
見いでむ時はあゝいつぞ
我を摘みませそをおきて
君の如くに病む我を」

花のねがひの切なさに
をのゝきながらとく摘めば
さわぎし心しづまりて
憂はれたりにはかにも
傷にいためる胸の中に
たかきたのしみ起りたり
○

たのしき五月

たのしき五月いまは來ぬ
木草の花はさきみちぬ
空の緑をよこぎりて
薔薇色の雲たゞよひぬ

瑞枝さしそふ梢より
鶯のうたひゞくなり
三葉のみどり柔らかに

小羊のむれ飛びめぐる

歌はずとばず病みはてゝ
ひとりわれ臥す草のうへ
遠き響を耳にして
それともわかず夢みつゝ

○

千度八千度

千度八千度とび続る
蝶と薔薇はおもふどち
されど黄金の色なして
かれをめぐれり日の影も

誰と薔薇はおもふどち
われは知らまし知りてまし
歌ごゑ絶えぬうぐひすか
默だしはてたる夕づゝか

薔薇の心しらねども
われは愛せぬものぞなき
薔薇も蝶も日のかげも
はた夕づゝも鶯も

○

春の夜風

春の夜風のぬるければ
さき殘りたる花もなし
心どもなくわが居れば

愛のおもひにまたなりぬ

いづれの花ぞわがむねに
堪へぬ思をおこさする
なくね絶えせぬ鶯は
そは白百合と告げぬべし

○

あきらけき眼

あきらけき眼を君もたば

ざだかに君は認むべし
かなたこなたにさまよへる
處女のかげをわが歌に
さやけき耳を君もたば
君はきくべしその聲を
彼れはなげきてはた笑みて
うたひて君を迷はさむ
彼はことばにまなざしに

わがごと君をまどはせば
樂しき春のゆめを見て
君はゆくべし森かげを

○

みどり色濃き

みどり色濃き君が眼の
やさしく我に向ふとき
ものも言はれずなりにけり
夢みる如きこゝちして

緑いろこき君が眼を
おもはぬ時こそなかりけれ
みどりの海はたちまちに
心のうちに溢れつゝ

○

逆捲きおこる

逆捲きおこる荒浪に
やどれる影ぞさだまらぬ

静やかにはたのどやかに
月ばみ空をさまよへど

君はしづかにのどやかに
わが居る前をさまよへど
胸のかげこそさだまらね
心の浪のしば立てば

○

心にながく

心にながく捨てはてし
面影またもうかぶかな
きみがことばの中にして
身にしみたりしものや何

我を戀ふとな君いひそ
人のこの世にめでたきは
たゞそれ春よたゞ愛よ
そはたゞ恥となりぬべし

我を戀ふとなき君いひそ
接吻せよ笑めよものいはで
しぼみはてたる花薔薇
明旦君にみせむとき

○

月影うけて

月影うけて菩提樹の
花の香たかくかをるかな
さへづりかはす鶯の

聲のひゞかぬ隈ぞなき
こひしき君よ木のもとに
やすらふ宵の樂しさよ
黄金色なす月かげの
しげみを漏りて照らす時
見よ菩提樹の葉をば見よ
心臓の形したらずや
されば戀する若人は

この下かけに憩ふなり

君は笑むなり遙なる
のぞみの夢に入りしごと
語れ戀人むねのうちに
いかなる望おこりしか」

わが戀人よ君にわれ
かたらむとこそ思ふなれ
あはれつめたき北風の

俄に雪にかはる日を

毛皮よそひて二人して
かざれる橇に身をのせて
鈴ふりならし鞭ならし
川越え野越え走らむと

○

とく森かげに
とく森かげに見いでつゝ

あしたに贈る花すみれ
のこる日かげに摘みとりて
夕にはこぶ花薔薇

君は知らずや美はしき
花のおもへることのはを
「晝はひねもす誠にて
夜はよもすがら愛しませ」

○

黄金の光

黄金の光そらに曳き
ひそかに星はさまよへり
夜のもすそに眠りたる
この世の夢をさまじと

木の葉の耳をそばだてゝ
森こそ立てれしづやかに
山は夢みるすがたにて

かげの腕をぞひろげたる

かしこに呼ぶは何ならむ
つよくも胸に響くかな
戀しき人のことのはか
はた鶯の歌ごゑか

○

今年の春

今年の春のわびしさよ

かなしき夢のつゞくかな
つらき思をうぐひすの
聲にもらせりさく花は

あゝほゝゑむな戀人よ
喜ばしげにほゝ笑むな
あゝたゞ歎けたゞ歎け
涙はわれぞ拭はまし

○

靜けき磯

靜けき磯に夜はきぬ
月は雲間をはなれたり
よする漣さゝやきの
こゑぞほのかに聞ゆなる

「かれは愚かしからずば
戀になやめる人なるか
かなしと見れば嬉しげに

うれしとみれば悲しげに」

月は空よりほゝ笑みて
こたふる聲も爽やかに
「戀する人ぞをこ人ぞ
またそが上に歌人ぞ」

○

影ほのぐろく

影ほのぐろく立つ浪を

翅にかけて飛びめぐる
しろき鷗をわれぞ見し
月はかゝれり中空に

浪をやぶりて音たかく
をどるは鱶よはた鱒よ
鷗は下りつまた立ちつ
月はかゝれり中空に

飛びかける魂愛しき魂

汝はかなしく心うし
汝はあまりに永近し
月はかゝれり中空に

○

我をば君が

我をば君が戀ひせりと
とくより我は知りたりき
されども我はをのゝきぬ
君がことばに出でしとき

いたゞき高く登りゆき
われは歌ひぬ山のうへ
磯邊の道をさまよひて
われは泣きたり沈む日に
燃ゆるが如き天つ日の
姿なしたり、わが心
はてなき愛の海原に
照りかゞやきて沈みゆく

○

黑みわたれる

墨みわたれる帆をあけて
わが舟はしる波の上
君が與へし苦しさも
こゝろの憂さも君ぞしる
君が心は吹きかはる
風のこゝろに似たるかな

くみわたれる帆を揚げて
我舟はしる波の上

○

君がなしたる

君がなしたるたは業も
われは隠せり世の人に
されど百重の浪わけて
我は告げたり鱗介に

人のこの世に我はたゞ
君によき名を殘すとも
はてしも知らぬ海原は
知るなり君がたは業を

○

鷗はなどて

鷗はなどてわれらをば
いぶかしげには眺むらむ
そはたゞ強く我耳を

汝が唇にあてたれば

汝がいひ出でむことのはを
知らむと鳥は思ふべし
汝がわが耳に接吻すとも
ことのはばかり滿たすとも

我は知らましわが胸に
響きわたるは何れぞと
ことばも接吻もいとゞしく

心のうちに亂れあふ

○

わだのみ中に

わだのみ中に年經たる
巖のうへにもの思へば
鷗叫びぬ風あれぬ
浪さかまきぬ泡立ちぬ
我は愛しぬうるはしき

めでたき人の數々を
されど彼等は今いづこ
風たゞあれぬ浪あれぬ

增補

痛み苦み

痛み苦み身を去れば
眠りぬわれはおだやかに
よにうるはしき少女子の
より來しことも夢の中
大理石なせるその顏容

眞球とまがふその瞳
奇しくも髪をゆるがして
おどろくばかり密やかに

おだやかにはた緩やかに
少女は身をばゆ動がして
よりかゝりたり我胸に
顔青じろき少女子は
わが胸うちぬ燃えたちぬ

樂みいたみうちませて
されど氷とまがふまで
少女の胸は冷やかに

「氷の如くひやゝかに
脈搏むともせずわが胸は
されども我はよく知らぬ
愛のいたみも勢力を
わが唇にわが頰に

のぼる紅かげたえて
胸に血汐の流れなし
されども我はたゞ君に」

病みを胸におもふまで
彼れは抱きぬわが身をば
鶏なきぬ――聲もなく
少女の姿消えさりぬ
○

ありしむかし

ありしむかしの面影の
うかぶもはかなな胸の中
あゝわれ君がかたはらに
楽しく過ぎしそのかみよ

眞晝の路を夢みつゝ
涙ぐみつゝ默しつゝ
よろめき行けば行き通ふ

人ぞあやしとわれを見し

夜としなれば人もなし
時こそいまと八衢を
われとわが影二人して
其處ともわかずさまよひぬ

靴音たかくひゞかして
橋うちわたりわが行けば
雲のひまもる月のかげ

さしこそ來つれおごそかに

君がすむ家の前に來て
君がよりそふ窓たかく
あふぎ見すれぼいとゞしく
こゝろのいたみ加はりぬ

窓の戸あけてともすれば
大路見し君われは知る
月かげあびて佇める

我を見し君われは知る

○

梢に秋の

梢に秋の風立ちて
夜の氣寒き森のかげ
黒き上衣に身をつゝみ
われたゞ獨騎りて行く
騎り行くまゝに言ひしらぬ

こゝろもわれにのりて來ぬ
胸すゞやかにひそやかに
われぞ近よる妹が門

吠えたつ犬の聲聞きて
下僕は出でぬ燭とりて
めぐる階とくふめば
ひゞく柏車のおとたかし
かをりゆかしく暖かく

絨氈(じとね)かゞやく部屋の中
われを待ちたり戀人は
われは急ぎぬその腕に

木の葉を風のわたるよと
思へばひゞく樫のこゑ
「をこなる夢にふけりつゝ
をこなる君よ何おもふ」

○

蜑のとまや

蜑のとまやにやすらひて
海原とほく見わたせば
ゆふべの霧はほのじろく
立ちこそわたれ波の上

燈臺の火はともされて
波路あかるくなりゆけど
沖邊はるかに漕ぐ舟の
しら帆のかげはなほさだか

われらは云ひぬ波かせも
くだけし舟も舟人も
よろこびうれひ水空の
なかにたゞよふ心りはひも

われらは云ひぬ遙なる
北の南のあら磯も
そのめづらしき國民(くにたみ)も
その世にしらぬならはしも

日かげもかをるカンゲスに
しらぬ大樹(たいじゅ)そしげりあふ
姿ゆかしくしづかなる
人はをろがむ花はちす

人もけがれぬラブランド
平(たひら)たきかしら廣き口
小さき身長(たけ)の火にかゞみ
魚焼きながら叫びあふ

耳そばだてゝをとめ子は
聞き耽りたりもの言はで
いつしか海はくれはてゝ
ありし帆影もなくなりぬ

○

橙の色

橙（オレンヂ）の色あざやかに
雲間に月のやすらへば
海のおもてはかゞやきて

黄金のすぢはひろごりぬ
うつ波しろきあら磯を
われたゝ獨さまよへば
世にもゆかしきかたらひの
こゑこそ響け波間より
あゝ夜のながさわが心
いま默（もだ）されずなりにけり
姿やさしきニックスの

來ては舞ひゝ歌ひつゝ
心も身をもまかせたる
わがかしらとれ汝が膝に
うたひて抱きて命をも
キスし去らなむわが身より

○

かさなる雲

かさなる雲のひまとめて

さやけき月のかげさせば
忘られはてしそのかみの
面かげまたもうかふかな

甲板のうへにうちつどひ
ほこりてくだるライン川
のこる夕日のにうち煙る
牧場の草もいろさやか
姿やさしくうるはしき

をとめのそばにわが居れば
青みもまじるその顔に
あかき日かげは戯れつ

琴のねひゞき稚兒うたふ
この世にしらぬたのしさよ
雲はいよ〳〵はれゆきて
心はそらになりにけり
城も木立も山も野も

うつゝともなく過き行けど
をとめの瞳さながらに
うつせるかげをわれぞ見し

○

樅の大樹に (Berg-Idylleの中)

樅の大樹に風鳴りて
月すみわたる山の上
こゝに年ふる山人の
小屋こそ一つ立てるなれ

驚くばかり彫られつゝ
中に置かるゝその椅子に
よりなば幸はいくばく母
その幸得たる今のわれ
少女は臺に坐をしめて
手をは置きたりわが膝に
星と照りたる双の眼よ
薔薇とにほへる唇よ

ゆかしく青き双の星
空にあるごとわれを見ぬ
白百合なせるその指は
動きぬ薔薇の花のうへ
母は糸くるいそしみに
われらの方を見おこせず
父はむかしの歌誦して
ひとり小琴をかなづめり

胸にひめたる秘事を
心ゆるしゝわが耳に
少女(をとめ)は告げぬひそやかに
聞(きき)えぬばかりひそやかに

「わが叔母君のうせまして
市に行く日はなくなりぬ
あな美しと見つゝこし
きそひの庭も今はよそ

風冷やけき山の上(へ)は
市のちまたに異なれり
冬としなれば日數ふる
雪にわれらは埋れつゝ
物怖(もの)ぢすなるわが身とて
夜な夜な出でゝ狂ふなる
山のすだまのかげ見れは
われはべのごと慄(おのの)くよ」

云ひも果てぬに小女子は
おのが語におそれけむ
にはかに口を緘みつゝ
眼をばおほひぬ双の手に

外には樅のかせ高く
うちには響く糸ぐるま
小琴のしらべさえ〳〵て
猶もきこゆる歌のこゑ

「おそるゝ勿れ少女子よ
惡しきすだまは狂ふとも
天つをとめはいつとても
君を守らむ少女子よ」

○

かゞやきそむる

(Auf dem Brocken)

輝きそむる朝の日
東の空はあからみぬ

はてなき霧の中
峰こそうかべ遠近に
長き靴をしわが持たば
風の早さを走るべし
かしこの山の峰こえて
はしき少女の家近く
また夢さめぬ臥床より
軽く窓掛ひきさりて

かろくきゝせむその額を
ルビーに似たるその口を
軽くもわれはさゝやかむ
小百合なしたるその耳に
「夢にも思へ相おもふ
君とわれとは離れじと」

附錄

ハインリッヒ、ハイネ評傳

ハイネは、彼れの時代に於ける、尤も卓絶せる一人なり。
遂に、一の反響を喚起することなくして罷めりと雖、彼れ
の聲は、眞の聲なり、

……ジョージ、エリチット……

「ハインリッヒ、ハイネ」は、一千七百九十九年十二月十三日、「ライン」
河畔「デユセルドルフ」に生る、其父は「サムソンハイネ」、其母は「ベ

ヤイ」、共に其統を猶太にうくるもの。其父の家、世々、尋常商賈たるに反し、其母系中、時に、文事に長じ、科學に名ありしものありきといふ。而して、ベチイは溫良貞淑、尤も常識に富みたりといへども、また頗る感情的傾向を有し、まゝ常規を失するものありしが如し。此性情や、甚しく、其子に遺傳したるものあるは論なきなり。

ハイネの幼時、チユッセルドルフは、佛蘭西の大公爵の居處となれり、これ「プレスブルグ」和議の結果として、佛に交附せられたるに因れり故を以て、先づ此幼兒の腦に裡印象せられしものは、即ち佛蘭西人なり、佛蘭西風なり、佛蘭西語なりしなり。ゲーテ曰く、幼年の記憶は決して移すべからず、と、眞に然り。ハイネが、後年、佛を愛し、其

鄉を捨てゝ、其國に轉し、遂に巴里の客舍に沒せしが如き、其因實に爰に存せるを見るなり。然れども、彼れが、終生其故國に對して熱情を有し、夢寐、其國人と自己とを一致するを忘却せざりし者、其天倫に出づるありといへども、又、其母の敎化によるもの多きに居らずんばあらず。何となれば、彼れの母は、其同種族が、獨人の凌辱するところとなるに關せず、常に、彼れに敎ふるに、其鄉土を愛し、其の國民に親むべきを以てしたればなり。ハイネ、初めは、母の敎育の下に在りしが、稍〻長ずるに及んで、一私立學校に送られ、次で、一部は軍隊的にして、一部は宗敎的なる、佛人の校舍に入學せしめられたり然れども、こゝに授けられたる衒學的の敎課は、性情彼れの如き兒童

に適せず、遂に、其同學者に廢物の譏を受くるに至れり。彼れが後年盛に譏刺の語をなし、嘲罵の筆を弄せる、此間に養成せらたる偏僻の性、大に其因をなせるものあるなり。もとより、彼れは、幼よりして偏固の風あり、而して、空想に耽るを好み、神秘的説話を聞くを愛せり、長ずるに及んで、此傾向著しく增加し、遂に其結果として、激動的の性格に、加ふるに、一種の狂熱を以てせり。

十六才にして、彼れの父は、彼れをして、商業に從事せしめむと欲し彼を、「フランクフォルト」の銀行家に送れり。彼れ爰に在る、僅かに二閲月、其性格の、全く商事に適せざるを知り、絶望して其父に歸來せり。然れども、一年或は二年を經て、更に、「ハンブルグ」に至り、

再び商務に鞅掌せしが、彼れは、其事業に對して、全然趣味と熟練とを有せず、而して、たゞ作詩と、讀書とに耽りしを以て、早く業に、其破綻を示せり。一千八百十九年の春、彼れの事業は、精算せざるべからざるに至りしが、彼れの叔父にして富有の銀行家なる、「ソロモンハイネ」の來援するに會ひ、幸に其終を全くすることを得たり。

此の如くにして、彼れは其事業に於ては、得る處なかりきといへども「ハンブルグ」の滯在は、全く時日の浪費にはあらざりき。乃ち彼は、甚だ獨逸文學に通曉するを得、又、「ユンゲ、ライデン」中に收めたる、優美なる詩篇を作るを得たり。彼れの叔父は、彼れの到底商業上に成功する能はざるを見、彼れをして、轉じて大學に入り、法律學を研究さ

せしめたり。愛を以て、彼れは同年「ボーン」の大學の學生となれり。此學生々活の間、叔父は資を給すること十分なりきといへども、彼れの戀着せし、彼れの女を以て、彼れに許すことをなさゝりき。彼れの此戀愛や、その生涯中、尤も永續せしものにして、且、その詩篇中、尤も吾人の賛美と、同情とを高むるの因をなすものなり。然れども彼れは、これが爲め、其教課を忽にせしことなく、その「シユレーゲル」の講義の如きは、尤も熱心に傾聽せりきといふ。翌年秋、彼れは、ある事情の下に、轉じて、「ゲッチンゲン」の大學に入學し、法律よりは寧ろ、獨逸史、及び其文學の研究に勉めたり。居る事暫らくにして、事ありて、此地を捨てゝ、直ちに、「ベルリン」に赴けり。こゝに於て

彼れは、「ヘーグル」「ベルンハーゲン、フォンエンセイ」、及び其有名なる夫人「ラヘル」等、と交を結びたりしを以て、彼れの文學的天才は大に發達の歩式を進め、其結果として、詩篇に親み、法律に遠ざかるに至れり。

一千八百二十二年、彼れは、初めて、其作、悲劇「ラートクリッヘー」、及び「アルベンソール」を出し、之に加ふるに、「リリッセス、インテルメッツオー」を以てせり。前二者は、更に世評に上らざりきといへども後者は、大に一般の賞賛を博し、彼れの名は、直ちに、叙情詩人の列に加へられたり。彼れが、其後兩親を「リューネブルグ」に省みし時、光輝ある詩人生活の、基礎をなせしを誇稱せしといふを見るも、彼れ

の此時の喜悦、察知するに難からざるなり。

一千八百二十三年の七月に至つて、彼れは「ベルリン」を去て、北海に濱せる「クックスハーベン」に赴けり。彼れ、もとより、神經的頭痛に苦めり、而して此病勢は、年を逐うて劇甚となり、其睡眠も、其詩文の卓絶の要素となれる、狂熱的困夢の、攪亂するところなりしを以て此行を起すの止むを得ざるに至りしなり。翌年の初めに至て、彼れは再び、「ゲッチンゲン」に歸り、更に法律學の研究に從事せり。此間「ハルツ」山に向て登臨を企て、「ハルツライゼ」なる光彩ある記行を草し又「ワイマール」に赴き、「ゲーテ」に面語せり。一千八百二十五年の夏、彼れは法律學士の試驗を通過するを得たり。此に先じて、其信仰を變

じて、基督教徒となり、新教徒の員に加はり、其名「ハーリー」を改めて、「ヨハン、ハインリヒ」となせり。彼れの此の如く、新教徒となりしは、彼れが、其創立者を目して、思想の自由解放者として、嘆美せし故のみにあらず、其信仰個條に向て、尤も同情を有せしを以てなり。彼れの叔父は、彼れの成功を喜び、多分の資を給せしを以て、彼れは「ゲッチンゲン」を去て、「ノルデルネー」に行き、その健康の回復につとめ、傍ら其詩、「ノルドゼービルデル」の最初の部分を草せり。歸來、彼れは居を「ハンブルグ」に定め以て、法律事務に從事せり。然れども、彼れは、畢竟詩人にして、法律家にあらず、故に、此企圖も、また、失敗を以て了れり。一千八百二十六年、彼れは、「ライゼイビルデル」

の最初の部分を出し、加ふるに、「ハルヅライゼ」、及び「デー、ハイムケール」を以てしたりしが、大に世の賞賛を博得したり。彼れは、これによりて、己れが天職の在る處を知り、次で、「ライゼビルデル」の第二冊を出せり。此書は、「ノルドゼービルデル」の、第二の部分に、「ノルデルネー」島の記事、及び其他を加へたるものなり。此に由て、彼れは、當時獨逸に於ける、尤も名聲ある文人を以て、目せらるるに至れり。而して、其記事中、「ナポレオン」を尊崇し、且、當時の革新的政策を推奬せるものあるが故に、全獨逸、及び澳太利に於ては、其發賣を禁止せられたりしかば、これが爲め、却て、世上の好奇心を喚起し、其讀者はます〳〵增加したり。此の如くにして、彼れは知らず識らず

政治の範圍に侵入したりしが、これ遂に、彼れが、詩人に兼ぬるに、政論記者を以てするの因をなせり。乃ち彼れは、「ライゼビルデル」の好評に激發せられ、政論記者となり、且、實行的政治家の性格を養はむと欲し、轉じて英吉利國に赴けり。彼れは、元來「ノルデルチー」の歸後、定住せる「ハンブルグ」を愛せざりしを以て、其處を去て、英に入るは、寧ろ、其適意とするところなりしなり。彼れの叔父は、彼れの企畫を賛助し、又豐かに、其資を給せしを以て、一千八百二十七年四月、彼れは、居を倫敦に定むるを得たり。

彼れの倫敦に對する感想は、イングリッシュー、フラゲメンテ」、及び其私信によりて、見ることを得べし。倫敦は、もとより、喧華熱鬧の地

常に、神經的頭痛を病める詩人に向ては、たゞ、失望を齎すに過ぎざりしなり。其政治界、及び議院は、大に彼れを感動せしめしといへども、其當時、萎靡せる文學界は、また、彼れを滿足せしむる能はざりしや論なし。その八月、彼れは、遂に得る處なくして、英國を去れり。英國の歸後、彼れは又、「ノルデルチー」島に赴けり。先きに、彼れは「ライゼビルデル」中に、此島を記載し、「ハノーベル」人の、貴族政治を攻擊せしも、猶、忘るゝこと能はずして、こゝに至りしなり。此年秋、彼れは、また、「ハンブルグ」に行き、其舊作を集めて刊行せり。これ乃ち、「ブッフデル、リーデル」なり。其形式に於ては、多少の非難を免がれざるも、其聲調の流麗なる、其想像の自在なる、其言辭の華美

にして、しかも、單純なる、而して、處々、諷刺譏誚の意を點綴したる多感詩人の面目、躍如として、楮表に現出し、一讀、卷を掩ふ能はざるものあり。彼れの名聲は、これに由て、いよ〳〵重きを加へ、遂に「ゲーテ」に次げる、叙情詩人を以て、目せらるゝに至れり。

詩人として、彼れは此の如く、成功せりきといへども、猶、政論記者たらむと欲し、「ムンニッヒ」に於て、刊行せられたる、ポリチッシェー、アンナーレン」、及び他の「コタ」の定期刊行物に執筆したり。然れども彼れは、またこれに適せざりき。乃ち彼れは、嚴密なること能はず、規律々遵奉すること能はず、加ふるに、輿望のあるところを知らず、而して、其政治的同情も、畢竟、詩人的感想なりしを以てなり。

一千八百二十八年七月末、此刊行物も、また失敗に了りしかば、彼れは「ムーニヒ」を去り、伊太利に向て、週遊を企てたり。此旅中、作るところのもの。題して「イタリエン」といふ。此間、彼れは、俄かに其父を想起し、思慕の情に堪へず、直ちに、「フロレンス」を捨てゝ、「ベニス」に至りしに、其危篤を耳にせり、此に於て、急行「ユールブルグ」に達せしが、遂に、其死去の報を得たり。

父の死去は、孝心深き彼れをして、痛嘆せしめたり。爾來彼れは、家に歸りて、母と共に、其の後事に從ひしが、事終て、一千八百二十九年の春、又「ベルリン」に出でたり。その翌年、彼れは「ライゼビルデル」の第三冊を公にせり。當時の文壇は、これが爲めに、頗る騷擾せ

しも、其詩、荒涼の風を帶べるが故に、非難の聲もまた從て高く、其友人すら、猶、之を難詰せり。彼れの多感なる、これに堪ふる能はず遂に、其友「モーゼル」と絶交し、又「ブラーテン」とも、相容れざるに至れり。此時、彼れは、轉じて、「ヘリゴランド」にありしが、こゝに、巴里に於ける七月の革命の、驚くべき報知に接したり。彼れは之を聞きて、滿腔の熱情、禁すべからず、巴里を翹望して、其革新の風、早く世界に瀰漫せむことを希へり。翌三十一年の初め、彼れの政治熱はいよ〳〵加はり、一文を草して、巴里の革命に、熱心なる賛辭を呈せり、然れども、革新の進行、猶、緩漫なるものあり。此に於て、彼れは、斷然、獨を去りて、佛に入れり。これ實に同年五月なりき。彼れ

の此行の目的は、自己を以て、佛と獨との聯鎖となし、一方には、獨の新聞に寄稿して、佛の政況を報じ、他方には、佛の書肆に托して、其詩篇を、其國に公にせむとするにあり。これによりて、彼れは、先づ、獨の有名なる新聞、「アウスプルゲル、アルゲマイネ、ツァイツング」及び其の他に、政事的論文を寄せ、「モルゲン、ブラット」に、美術展覽會の一般報告をなし、また「バルツライゼ」「ベーデル、フオレ、ルッカ」等の一部を佛譯して、佛の雜誌に投せり。此後者は、著しく、佛人の注意を喚起したりしが、次で、「フランチェージッジェー、ツースタンデ」の佛譯を出すや、其名聲更に大に揚れり。此成功に激發せられて、彼れは、一千八百三十四年、獨逸の宗教史、及び哲學史に關する論文を出

せり。然れども、この文中に點綴せられたる、嘲謔及び暗刺は、之を釋するに、獨逸文學の精通を要するを以て、其趣味を有せざる佛人には、遂に理解せらるゝことなくして了れり。

佛に於ける不成功に反し、彼れの此論文は、甚しく、獨逸の人心を擾亂せしを以て、遂に又、全獨逸、及び澳太利に於ては、彼れの從來、及び後來の著書、悉く發賣禁止せらるゝに至れり。この精神的黜罰は獨逸政府に對する、彼れの怨恨を助長せしが故に、彼れは盛んに、諧謔譏刺の筆を弄して、これに報ゆる所あり。然れども、彼れ個人としては、甚だ尠なく、專制獨裁の風を脱却せしめむとする希望より來るもの、其尤も多きに居れり。

此時に當て、巴里に流寓せる獨人中、有名なる公法學者にして、且巧妙なる文章家なる「ルードウ゠ッヒ、ベルネ」あり。嚴格にして、且眞率なる共和黨員にして、ハイヲが、未だ商務に從事せるの時、早く、既に、政論記者として、名ありしなり、ハイネは、當時獨逸に於ける自由的運動に對して、彼れと全然、反對の意見を有せり。始め兩人は相提携せしが、ハイヲは、嘗て悉く、革命的の議論を稱賛したりしかば、彼れは、公然其所論の、革命の原因を輕々に看過せるを非難せり。これより、遂に全く相和せざるに至れり。

「ベルネ」の攻撃は、頗る激烈なりしが、ハイヲは、これに對して、表面上、何等の答辯をも與へざりき。然れども、「ベルネ」の死後に至て、

「ルードウ゠ッヒ、ベルヲ、アイネ、デンクシュリフト」と題せる、訕謗の文を公にせしかば、人々皆、彼れの性格の陋劣なるを詈れり。而して此文中、「ヘル、ストラウス」の夫人の名譽を傷けしものありしを以て、「ストラウス」は怒て、彼れを街路に漫罵せり。彼れ堪ふる能はず、遂に彼れに約するに、決鬪を以てしたり。一千八百四十一年七月七日、兩人相會して、互に短銃を擬し、「ストラウス」先づ射る、丸、「ハイヲ」の臀部を擦過せり。ハイネ次て射る、また中らず。兩者幸に事なきを得たり然れども、ハイネは甚しく、其對手を嘲罵せしを悔い、爾後、輕卒なる誹謗を謹めり。

此間に在て「ハイヲ」は、「マチルド、クレセンス、ミラー」と情交を結べ

り。「ミラー」は、容色絶美なりしを以て、求婚者頗る多かりしも、皆斥けて受けず、遂に「ハイチ」と、「サンスルピス」の會堂に、結婚の式を擧げたり。此結婚は、幸福にして、又、不幸なりき。何となれば、「ハイチ」は、當時困阨の地位に在り、而して、其妻に、安易と、快樂とを與へむと、欲せしを以て、知らず識らず、秘かに、佛政府より恩給を受くるに至れり。此事實の、普く流布したるは、一千八百四十八年にあり。彼れは、辯解頗る勉めしも、これ明らかに、彼れの生涯に汚點を印したるものなりしなり。

佛に於て作られたる、彼れの詩文は、一千八百三十九年以來「デル、ザロン」なる名の下に、刊行せられしが、四十年に出されざる第四卷、即

ち最終の卷は、有名なる小說的短篇「デル、ラビー、フオン、バハラッハ」を含有せり。猶、彼れの詩にして、光彩ある、「アタトロイル」(一千八百四十一年)、及び「トイッチュランド」(一千八百四十四年)等は、漸次刊行せられたり。これ等は皆、文學的、政治的の嘲謔を含みたるものにして、又獨逸の輿論を喚起したりしかば、普魯西政府は、非常の嚴密を以て、彼れの著書の發賣を禁遏せり。彼れは、此の如くにして、全く、其故國の放逐者となりしかば、其老母、及び老叔父を顧みるにも、亦少なからざる困難ありしなり。乃ち、普魯西公使は、其國土の通過を拒絕せしかば、其「ハンブルグ」に到るも、「ホルランド」より、迂回せざるべからざりしなり。

已にして、彼れは、其叔父の死去にあへり。彼れは、「ハイネ」に、終始資を送ること豐かなりしが、其子「カール」は、全く之を停止せしを以て、ハイネは、大に失望し、其極、神經麻痺の病を得たり。これ其死に至るまで、彼れをして苦惱止まざらしめしものなり。彼れは初め、其明を失ひしが、猶、歩行するに困まざりき。然れども一千八百四十八年五月、巴里市中の散歩より歸るや、遂に病床に倒れ、また、起つこと能はざるに至れり。

彼れは、病床に在りて、其妻及び「ラ、ムッシュ」と呼ばれたる一貴女より、懇切なる看護を受けしが、其頭腦は甚だ明確なりしを以て、一千八百四十九年、多くの詩篇を草し、又、五十二年、「ローマンケロー」を

作り、後更に「レッッテ、ケヂッテ」の名を以て刊行したる多くの詩、及び他の多くを篇せり。斯の如くにして、此多感にして、天才ある詩人は、一千八百五十六年二月十七日、遂に其巴里の客舍に永眠したり。彼れが死に先だつ一年。獨の歌者の伴、巴里に來れり。彼等の歌ふところにして、尤も聞くべき者は、彼れの詩なりき。彼等、「ハイネ」の頻死の狀を聞き、其巧妙の名ある者數人、相率ゐて、彼れを病牀に訪ひ、以て、彼れが詩を歌ふ。彼れ驚喜して曰く、これ、歌の尤も俊拔なるものなり、わが詩思を歌ふ、何人か我れに勝るものあらむや、と。これ、實に彼れが、獨逸より受けたる、最後の禮なりしなり。嗚呼、獨逸、此多感なる詩人の生れたる處、法外者として、擯斥せられたる

處。而して、彼れの詩の、永久にわたりて、吟誦せらるゝ處にあらずや。「ハイネ」の天才は、其形式の多樣なるところに就きて、見るを得べし。而して、これ實に文人として、精密なる、且、確實なる評價を彼れに下すこと、能はざらしむるものなり。彼れは、詩人としては、殊に、「アリストファネス」、「バイロン」、及び「バァーンス」に類し、文章家としては、「ステルネー」、及び「ジュアン」に似たり。然れども、此類似や、彼れの天才が、如上の詩人、及び諧謔家の卓絕せる特質を結合せるに由れり。面して、猶、彼れは其結合に捺するに、自己獨創の印を以てし、決して、其模倣を許さゝるを見るなり。實に、彼れが、詩人、及び諧謔家の兩方面を具備せるは、意想外の事に屬し、從て彼れ

の聲價の大部分は、これによりて、博得せられたるものなり。

彼れの、最初に公にせる詩篇は、簡潔にして、寸鐵殺人的の叙情詩なり。而して、彼れは之に與ふるに、其時代精神に、尤も適應せる形式を以てせり。乃ち、此時に當て、獨逸國民は、已に詩的製作物、殊に感情的製作物に飽けり。自由戰爭以來、昏睡病的顯象に在り。新ゲーテ、新シルレル出づるも、決して、傾聽せらるゝ狀態に在り。故を以て、彼れの詩の如き、簡潔にして、優美の情に富み、而して意外なる機智的、諧謔的結尾を有するものは、自づから、國民の困夢を攪醒せしを以て、遂に、新春の先驅として、獨逸人中に散布せられ、傳誦せらるゝに至りしなり。

彼れの詩形の特質は、一瞥以て、之を評することを得べし。乃ち、容易に、其全躰を理解せしめ、記憶せしめ、同情の念を惹起せしめ、覺えず、唇邊に微笑を湛へしむるにあり。屢優美なる不規則に起因せる音樂的、聲律的の個處あるにあり。他の詩人には、殆んと見るべからざる言辭の單純素朴なるにあり。マッシューアールド」、彼れを評して曰く、「ハイネ」の、詩的形式を用ふるに妙なるは、よく匹敵するものを見ず。彼れは主として、古獨逸の名詩の形式を用ふ、乃ち、吾人の歌曲の形式よりは、一層、迅速と、優美とを有せるもの是れなり。彼れの之れを用ふるや、十分の輕妙と、容易とを以てす。而して、其固有の充實と、情熱と、及び其形式に存する古色とを失はずと。これ、

蓋し、其當を得たるものならむ。

詩形に於ては、確かに、彼れは據るところありといへども、其内容に至ては、全く、彼れ獨得の思想にして、決して他人の蹈襲ならざるなり。其詩中、往々、他人と類似する處ありといへども、もとより、少數にして、且、偶然的なるものゝみ。之に反して、不成功なる、彼れの模倣者は、甚だ多きを見るべし。實に、彼れの詩の、單純にして、輕快なるは、凡庸詩人をして、模擬の容易なるを思はしむるも、其用語の素朴、己に模すべからず。加ふるに、其詩の至妙の要素たる優麗雅馴に至ては、到底、彼等の企及すべきところにあらず。

「ハイネ」は、詩人として、新徑路を拓きしのみにあらず、又、文章家

として、散文新躰を創製せる功績を有す。乃ち、彼れは、適當に使用せば、獨逸語を以て、平易と、優美とを現し得べきを、示したる最初の人なりしなり。彼れは、猶、其文中に、機智的、滑稽的、及び聲律的、詩的の語を挿入れ、これに由て、獨逸文學に希有なる感情を含有せしめたり。而して、其表示中、確かに、大膽に、且、驚嘆すべき者ありしを以て、爲めに、衒學的批評家の怒を買へしなり。彼れの文中ある者は、「ルーテル」の「クラフト、アウスドルック」に類似せり。然れども、これ、決して、一時の遊戯にあらず。彼れの心中、明瞭の意志ありて、こゝに至れるものなり。而して、此部分は、飜譯家は、絶望して、其手を束ぬといへども、少しく見識ある讀者は、直ちに、能く

了解し得る處なり。猶、其表現に關して、言辭の選擇に苦心せる、彼れの如きは、蓋し尠なし。其文のみにあらず、其詩に於ても、輕々、叙し去て、更に推敲を費さざるが如きも、今猶、保存せらるゝ其草稿を檢すれば、塗抹縱横、直ちに、其苦心の容易ならざるを察知し得べし彼れの多量なる散文の題目は、其範圍、極めて廣く、此點に於ては、確かに、其詩を凌駕せり。彼れは、哲學に屬すると、美術、文學、及び自然に關するとを問はず、眼に映じ、手に觸るゝもの、悉く、採て其題目となさゝるなく、而して、熱心と、熟練とを以て、取扱はざるものあらず。又、其記載は、甚だ精密にして、細大到らざる處なく、其倫敦の街衢、鑛山、風景、個人の性格の描寫の如き皆然らざるものあ

らず。彼れの文を草するや、たゞ漫然、筆を下するあらず。必ず、確然たる目的を以て、之に從へり。乃ち、彼れは、世界、殊に獨逸の社會的、政治的狀態に滿足せざりしを以て、あらゆる形式に於ける、政治的束縛に向て、戰鬪し、破壞するを、其終生の目的とせりしなり。而して、彼れは、此戰鬪に從事するに、人間の用ひ得る最鋭の利器を以てし、尤も勇敢に、尤も大膽に格鬪したり。

ハイネの大作を出さゞりしは、事實なり。然れども、其詩文中にあらはれたる機智及び譏誚は、他の尨然たる大冊にして、人生觀、世界觀を沒却せしものに比せば、其優劣果して如何ぞや。

個人として、彼れは、多くの卓絕せる、且、愛すべき性質を有せり

彼れ、佛に在りて、適意の生活を送りしも、猶、其故國を忘却せざりしは、既に云へり。實に、彼れの故國を去て、巴里に住永せしは、自由民として、好遇せられ、誘導せられしによれり。然れども、猶、佛國的よりも、獨逸的思想を有し、常に、故國の名譽を失墜せしめざらむと欲せり。彼れの、其間に於ける決鬪も、また此に出でしに外ならざるなり。彼れは、又交友に厚く、熱情に富み、從て義俠の風あり。故に、困窮者を保護し、屢、他人の怨恨を報せりと云ふ。彼れは、猶義務を盡すこと嚴密にして、其尤も注意せしは、負債償却の事なりしなり。

彼れの孝心は、深かりき。近時、刊行せられたる彼れの言行錄中、其

父に對する愛を證明するもの、頗る多し。其母に對するものは、彼れの詩文中に、著しく散見せり。

嗚呼、此天才ある叙情詩人、雲の如く過ぎぬ。然れども、星の如く、彼の天にのこれり。燦然たる光、陸離たる影、彼れ、蓋し、彼れと共に滅せむか。

大正八年六月一日印刷
大正八年六月五日發行

【定價金三拾五錢】

著作者　尾上八郎
發行者　大阪市東區北久寶寺町四丁目五十一番地　藤谷長吾
印刷者　大阪市西區新町通り一丁目五十六番屋敷　河上貞次郎

發行所　大阪市東區北久寶寺町四丁目
電話東二一二〇番
振替大阪二七八五番
藤谷崇文館

不許複製